日本福祉大学 全学教育開発機構 報告誌

きょうゆう

第１号
2008年11月

全学教育開発機構主催全学ＦＤ推進事業

きょうゆうサロン報告（第１回・第２回）

第１回きょうゆうサロン

「知多学の夕べ」～この豊かな地域の資源をさらに教育へ～

2008年2月28日(木)18:00～20:30

第１回きょうゆうサロン連携企画

「知多半島ＮＰＯ現場見学バスツアー」

2008年3月12日(水)9:30～16:30

第２回きょうゆうサロン

「表現者は学ぶ」～「表現」はいかに教育を豊かにするのか～

2008年5月22日(木)18:00～20:30

日本福祉大学
全学教育開発機構

「きょうゆう」誌の発行について

この度、全学教育開発機構では、「きょうゆう」という名称にて報告誌を発行することにいたしました。これは、機構の活動や教育改革の諸課題などについて、主に学内の教職員のみなさんに報告するための冊子です。

誌名の「きょうゆう」とは、２００８年２月より開催しています「きょうゆうサロン」にて使用している言葉ですが、教育に関するさまざまな実践などを「共有」するという意味、本学の教育に携わる教員や職員のコミュニケーションを促進していく「教友」といった意味を兼ね備えたものです。以前より、教職課程で、先生方が学生を指導するために組織された「教友ゼミ」にて使われてきた言葉であり、それを使用させていただいております。

第１号である今号につきましては、この間の「きょうゆうサロン」の報告集という形で発行いたします。今後も機構主催のイベント等の報告のみならず、教育改革や教育実践などのさまざまな事例報告、文部科学省などの大学教育に関する政策動向など、さまざまな特集を組んで、本学の新しい大学づくり、教育づくりに貢献するような冊子にしたいと考えておりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

2008/11　全学教育開発機構

目　　次

全学教育開発機構 報告誌「きょうゆう」の発行によせて　4

１．きょうゆうサロン開催の経緯　5

２．第１回きょうゆうサロン「知多学の夕べ」

開催概要　6
報告「全学ＦＤの推進と教養教育」　9
基調報告「地域から学ぶ」　10
実践報告
①「知多福祉教育のフィールド施設・団体の紹介」　12
②「知多半島における歴史系フィールドワークの試み」　13
③「知多半島の里山をめぐる現状と問題」　14
「教養フィールドとしての知多地域の意義・あり方」～参加者の感想～　15

３．連携企画「知多半島ＮＰＯ現場見学バスツアー」

開催概要　17
見学先
① 知多市市民活動センター（地域福祉サポートちた）（知多市）　18
② ＮＰＯ法人 ゆいの会（知多市）　19
③ ＮＰＯ法人 だいこんの花（知多市）　20
④ ＮＰＯ法人 もやい（阿久比町）　21
⑤ ＮＰＯ法人 りんりん、菜の花、toピア（半田市）　22
⑥ ＮＰＯ法人 ゆめじろう（武豊町）　23
⑦ ＮＰＯ法人 チャレンジド（美浜町）　24
参加者の感想　25

３．第２回きょうゆうサロン「表現者は学ぶ」
開催概要　27
基調報告「表現」するキャンパス作り
～回想 ２００６年時点の「初年次教育」「教養教育」改革答申の発想～
（教育改革推進委員会第1WG報告）　28
実践報告
①「身体で語ることば」　30
②「学生の活動をｆｕｘｉで観る」　31
③「舞台を学外に拡げた学びつくり」　32
「教養教育における表現をいかに重視するか？」　33
参加者の感想　34

編 集 後 記　35

全学教育開発機構 報告誌「きょうゆう」の発行によせて

昨年４月に立ち上がった全学教育開発機構（以下、機構と略）では、今年に入って２回の全学ＦＤを「きょうゆうサロン」として行いました。この企画が構想された経緯には、機構の会議、とりわけ教養教育の見直しに関連した教養教育検討第１プロジェクトのワークショップがあり、そこで日本福祉大学の弱みのひとつとして、学内での交流の機会の少なさが指摘され、教職員同士の関係づくりをもっと促進したいと議論したことがあります。

日本福祉大学がまだ規模が小さく、社会福祉学部、女子短期大学部、経済学部から構成され、しかも全学教授会という大学運営方式が採用され、くわえて名古屋の杁中（いりなか）にキャンパスがあり、通勤・通学などにも便利であった等の条件、そして何よりカリキュラム３原則（①研究と教育の統一的発展、②学生の自主的、集団的研究の促進、③一般教育と専門教育の有機的結合）という今日的にいえば、いわば大学としてのカリキュラム・ポリシーを明確に内外に示し、社会的認知もされていたことが、当時の大学コミュニティの活性化、それは言い換えれば建学の精神を現実のなかに息づかせることになったのですが、に大きな役割を果たしたことは言うまでもありません。

それから比べると今日の日本福祉大学は、美浜、半田、名古屋の３つのキャンパスにわかれ、教学領域も６学部と通信教育部と規模が大きくなり、教職員や学生数、そして学生像自体が大きな変化をみせています。こうした今日の諸条件のなかで、もういちど日本福祉大学らしい大学コミュニティを再構築したいというのが、現在の教養教育改革の背景につながっています。

現在、全学教育開発機構では、教養教育連絡会議を後期から設置して、旧第１プロジェクトのメンバーに全学教務委員会の諸先生に加わっていただき、教養教育改革の最終報告案にもとづく具体化を進めています。来年２月教授会にはアクション・プランの案を提示していくというスケジュールです。そのプロセスの中では議論形態の１つとして、引きつづき「きょうゆうサロン」方式の全学ＦＤを開催しつつ、教職員、学生、関係者の幅広い参加を得つつ、合意形成に努めたいと考えます。

どうかよろしくお願いいたします。

2008年11月4日
全学教育開発機構長　木戸利秋

1．きょうゆうサロン開催の経緯

「きょうゆうサロン」の目的

＊「共　有」･･･　すぐれた教育実践の取組みや資源を共有し、新しい教育を生み出そう

個々の教員が実践している優れた取組み、大学の各部局で行われている教育の発展につながるさまざまな取組み、これらの取組みが開発･開拓した教育資源を共有し、活用していく

＊「教　友」･･･　本学の教育に携わる人たちがお互いを知り、教育実践を交流しよう

学部や学科、職種や部局を越えて、お互いの教育実践を理解し参考にするとともに、教育を絶えず改善していこうとするコミュニティを創出する

＊「饗･夕」･･･　本学の教育に携わる人たちの相互のコミュニケーションを促進しよう

「肩の凝らない」懇談、ざっくばらんに活発な議論ができる工夫を行い、コミュニケーションの促進をはかる

２．第１回きょうゆうサロン「知多学の夕べ」開催報告

本学が知多半島の地に移転して早や四半世紀。
歴史、文化、風土、自然、産業、福祉・・・
知多半島総合研究所の多様な研究成果・・・
この豊かな半島は、まさしく教育資源の宝庫
第1回きょうゆうサロンは、この土地を舞台にした
教育実践の報告を中心に、その豊かさと可能性を
共有しました。

なぜ「きょうゆうサロン」が必要なのか（その経緯と趣旨･目的）

２００７年度に設置された全学教育開発機構とその所属組織の一つである教育開発推進室は、**「全学的なFDをはじめとする教育力向上のための研究･研修事業」**の推進を、規程の中で目的の一つに掲げています。これについて、何らかの取組みに着手することが求められていました。

一方、同機構と推進室が、２００７年度当初よりさまざまな教育改革課題への取組みを進めていく中で、本学の個々の教員やさまざまな部局が取組んでいる**ユニークな教育実践、それらが開拓してきた貴重な教育資源などについて、大学全体で情報共有して互いに参考とし、新しい教育につなげていく**べきとの提起がなされました。特に、新しい教養教育を検討する２つのプロジェクトにおける、**学部を越えた教員間のコミュニティづくり**が必要との指摘が契機となり、教育実践に関わる教員の日常的な交流をさらに活発にすべきとの課題が見えてきました。

これらの課題を解決することは、本学に新しい教育展開や教職員の結束を生み出し、教育の力をさらに高めるだけでなく、その力強さを世の中にアピールすることにもつながります。地域社会における「知の拠点」としての本学の教育の存在感を一層強め、今後の新しい学生の獲得などの課題解決にも、長期的に寄与するものと思います。

そこで、全学教育開発機構･教育開発推進室として、教育実践交流の懇談会を定期的に開催することを提案しました。毎回異なるテーマを設定し、本学教員を主に、職員や学外ゲストに加わっていただくなど、活発かつ「肩の凝らない」懇談を通して、上記のような、新しい教育実践の展開や教員間のコミュニティの創出をねらうものです。また、全学教育開発機構の課題であるＦＤの活性化を意図するものでもあります。

これらの趣旨･目的を踏まえて、この懇談会に**「きょうゆうサロン」**の愛称を与えて、開催の周知をはかるとともに、親しみをもって参加してもらうことを目指しました。

「きょうゆうサロン」の概要

主　催　：全学教育開発機構
開催日　：各年度数回
開催場所：主に本学キャンパスにて開催
開催形態：報告と懇談
　　学外の教育資源の見学ツアーなども開催する
テーマ　：教育に関わるテーマを設定（毎回変更）
開催内容：＊テーマに関わる基調報告（学内外の講師）
　　＊教育実践･教育資源に関わる報告
　　＊テーマに関する懇談
　　＊交流会

これまでの「きょうゆうサロン」とこれから

第１回は「知多学の夕べ」と題して、２００８年２月に開催し、本学が立地する知多半島を舞台とした教育実践を報告いただき、互いの知見を深めました。翌３月には、連携企画として、本学の研究教育に以前よりご協力をいただいています地域福祉サポートちたにコーディネートしていただき、知多半島内のさまざまなＮＰＯの現場を見学するバスツアーを実施しました。

第２回は、「表現者は学ぶ」と題して２００８年５月に開催しました。この間の教養教育･初年次教育の検討に際して重要性が指摘されてきた、教育における「表現」の可能性について、これまでの検討経過や教育実践事例などを共有することができました。

今後も、各学部のＦＤ実践、語学教育、教養教育、キャリア教育など、多様なテーマでの開催を予定しています。

開催概要

開催の趣旨と目的

本学が立地する知多半島の地域づくり・自然環境・産業・歴史・文化などを、教育資源として本学の教育活動にさらに活かすことを目的に、第１回きょうゆうサロンを開催しました。知多半島総合研究所や社会連携諸事業が、知多半島を新しい視点で捉えなおし、地域のさまざまな人々との関係構築をすすめる中で、学生の新しい学びを作り出す教育資源として、知多地域が高いポテンシャルを持つことがわかってきました。また、経済学部の「地域学」や現代GPなどの教育実践、社会福祉実習教育での半島内の法人との関係強化など、各学部・各部局における地域の教育資源化も盛んにすすめられてきました。

しかし、知多半島総合研究所の研究成果等を教育資源として見ようとする視点や知多地域の教育資源化に関する全学レベルでの把握や情報共有の取組みは不足していたのではと思います。そこで今回は、教員の教育実践とその成果を報告し、知多半島を教育資源として認知・共有する全学的取組みの嚆矢とすることを意図しました。あわせて、教員間で互いの教育実践について認識を深め、教育の絶えざる改善･改革に研鑽していく学内の新しいコミュニティ創出の嚆矢とすることも意図しました。

開催内容

テーマ　：　「知多学の夕べ～この豊かな地域の資源をさらに教育へ～」
開催日時　：　２００８年２月２８日（木）18:00～20:30
開催場所　：　美浜キャンパス教員ラウンジ（教員第1控室）
主催／協力　：　主催－全学教育開発機構／協力－知多半島総合研究所
司　会　：　谷地宣亮 経済学部准教授･全学教育開発機構員
内　容
18:00　挨拶・報告「全学ＦＤの推進と教養教育」木戸利秋 全学教育開発機構長
18:15　基調報告　「地域から学ぶ」　千頭　聡 知多半島総合研究所地域･産業部長
18:45　実践報告
①「知多福祉教育のフィールド施設・団体の紹介」
柿本　誠 社会福祉実習教育研究センター長
②「知多半島における歴史系フィールドワークの試み」
曲田浩和 経済学部准教授
③「知多半島の里山をめぐる現状と問題」　福田秀志 現 健康科学部准教授
19:30　質疑応答・懇談（軽食を交えながら）
20:30　終了

参加状況

全参加者数　　４７名（報告者含む）
社会福祉学部教員10名、経済学部教員9名、福祉経営学部教員７名、情報社会科学部3名
通信教育学部教員 2名、実習指導講師3名、知多研研究所教員１名、知多研研究員　１名、職員11名

開催を終えて

懇談の時に、参加された皆さんに感想を伺いましたが、軽食を交えながら和やかな雰囲気の中で、活発にご意見をいただくことができました。

その際に、「知多半島についてこのようにまとめて勉強したのははじめてだ」との感想が出されましたが、知多半島を素材・対象とした多領域にわたる教育実践事例を一度に報告し、この地域を再度見直そうとする機会は、これまで無かったものと思います。その意味で、このテーマでの開催自体に意味があったと評価できるでしょう。他にも、知多半島をフィールドとして活躍する教員の多さに感嘆したとの意見や、この地域の魅力に共感するといった意見、自分もこんな教育を実践しているといった事例紹介などがなされました。この地域の教育資源としての豊かさや可能性について情報共有するというねらいは、一定の成果をあげたといえます。

また、複数学部からの報告と懇談を通して、それぞれの教育実践に対する認識を深めるとともに、学部を超えた交流をはかることができました。なお、報告者の報告の中で、地域を舞台にした学生の学びの有様が、彼らの努力･苦心する姿なども交えて紹介されました。学生が地域でどのような学びを展開しているか、その多様性も含めて認識できたことも大きな成果でした。

報告「全学ＦＤの推進と教養教育」

木戸 利秋 全学教育開発機構長

きょうゆうサロンの開催に至る経過と趣旨

全学教育開発機構では教養教育を検討する２つのプロジェクトを設置しており、その中で学部を越えた教員間のコミュニティづくりが課題となっていると考え、今回の「きょうゆうサロン」を開催するに至った。第１回のテーマは、「知多学の夕べ」とし、全学教育開発機構が２００９年度にむけて検討を進めている教養教育のプログラムなどを紹介するとともに、知多半島を教育の資源としている先生方よりご報告いただき互いの知見を深めることを趣旨とする。

教養教育第１プロジェクトのとりくみ紹介

本学の教養教育の定義について、全学教育開発機構内外の先生のご協力をいただき６回にわたり審議し、現在、３月教授会に向けての中間報告を準備しているところである。資料にある２つの図は、プロジェクトで検討に使っている資料で、どのような角度で教養教育を考えているかを示している。図１は、建学の精神と創立１０周年に策定された教育標語、２００６年度の教育改革推進委員会で確認した教育ミッションに沿って、見据える力、共感する力、関わる力と関連させ、全体を包括する伝える力＝理解する力を本学の教養として特徴づけた資料である。図２は、教養教育をどのような枠組みで展開するかを考えたイメージである。新しい教養として示している項目に関わった学部横断的な科目づくりを行い、入口から出口までの４年間トータルで教養教育を考える視点が求められている。

教養教育第２プロジェクトのとりくみ紹介

教養教育の枠組みの中で知多地域をめぐり共感する力などを学ぶプログラム、仮称知多学を検討中である。「知るべきことが多くある教養フィールド知多半島」を示し２００９年度に向けて検討している。このプログラムは、美浜町に移転して四半世紀経ち知多半島総合研究所の実績をはじめ、さまざまな研究レベルで取組まれており、個別に教育レベルで生してきたものを大学全体の教育プログラムとして打ち出し、新しい教養教育のイメージを作ることが趣旨である。この科目は、知多半島をベースとしたもので「異なる世界や世代とのコミュニケーション」「市民感覚と公共感覚を身につける」「大学の学びの世界へのみちびき」「学生自らが地域や社会に向かい情報発信」を教養教育にふさわしいかたちで学ぶものである。

１）「知多半島理解講座」（仮称）
オムニバス形式のオンデマンド授業で、１年生を中心に６学部に展開、知多半島の現場で活躍する方に登場願い効果的に知多半島の歴史を含めた共通理解を目指す。

２）「知多地域フィールドスタディ」（仮称）
知多半島をフィールドとした教養ゼミナールで、学部横断型の１５人規模のクラス編成を想定。他学部学生との交流機会として提供。

基調報告「地域から学ぶ」

千頭 聡　知多半島総合研究所地域・産業部長

社会人に学生を育てる

私のもともとの専門は、大阪湾の水質汚濁のシミュレーションなどの環境計画である。このテーマは三十数年間研究されているが、それでも社会は変わらないと痛感した。現在の私は、環境の分野について市民や企業、行政の方々と関わりを持つことが多い。エディケーションは、日本語では教育と訳しますが、本来の意味は「引き出す」という意味で、「学生の持っている潜在能力を引き出す」ことが我々の仕事である。最近、学生を見て、社会人として何が必要か、そこから逆算して現在何がサポートできるかを考えて教えている。企業人から、新入社員のコミュニケーション能力が極端に無いと言われるが、学生も同じで、例えば、講義で学生にさんざん説明したあげくに、「先生何したら良いですか」と言われることもある。そこで、社会に出る準備段階で社会人に育てるということが大切なことだと考えている。

学生が学ぶ時

学ぶことが何かを理解していないと周囲との関係性がつかめない。自分は、中心にいて周囲に数人の友達がいる、そこを超えてゼミや社会の中での自分の立ち位置を掴んでいない。ある時、サービスラーニングという考え方にアメリカのバーモント州立大学の環境学部で出会った。この学部の授業は、環境関係の学部なので今日は水質分析法を学生に教え、来週は学生がコミュニティあるいは高校に出かけて、習った水質分析の方法を大学の授業の一部としてコミュニティの人たちあるいは高校生に教えるものである。その考え方は、私が地域で体験するものとオーバーラップし、学ぶ＝伝えられることだと実感している。授業で我々が頑張っても学生自身が学べているかわからない。しかし、学生が人に伝えようとした時に何を理解していないか気づくので、いろんなところにそういった仕掛けをしている。

研究室の取組み

千頭研究室では、地域研究を実践しており、最初は岩倉市のワークショップに学生が参加した。学生が、頻繁に地域に出かけた結果、私は招待されなくても、地元のお祭りなどに学生が招待されるように変わった。美浜町の総合計画を支援したときには、十数回のワークショップにゼミ生が参加したが、まちづくりを推進している方々が学生をうまく生かし、うまく持ち上げてくれ、その結果として学生が成長した。旧加子母村（現中津川市）でも、学生が地元で色々なヒアリングをおこない、そのまとめとして、加子母村には「人の循環」、「モノの循環」、「情報の循環」の循環図を作成したが、地元で発表すると高い評価がなされ、その後も循環図を使って説明をされていた。また、加子母小中学校の教員研修会に学生が参加して大胆にも加子母村の紹介をするなど、地元で育てられてきた。去年は宮田村でインタビューを延べ１００人程度実施した。４０時間ものビデオを４０分程度にまとめて宮田村で昨日発表をした。村長をはじめ宮田村の皆さんが参加し、良い評価をいただいた。最初は、心配していましたが、インタビューのプロセスをとおして学生が成長した。このように学生が地域調査に取組む意義は、地域社会がどう構成され、社会はどう動いているか、社会人になる自分はどんな立ち位置で数十年もの社会生活を送ることをイメージすることにあり、最初の問題意識で社会に出ていく学生をどう育てるかにつながる。

地元の方からの挨拶

大学は外部から見た場合、地域社会の中で、地域を変えていく一つの原動力になる。教員は、学生だけを相手に教育していてはいけないのである。バーモンド州立大学の取組みも同じ線上にあるが、学生を環境の専門家に育て、地域の市民を、自らの環境調査を行い、問題分析し、改善できる市民を育てることが重要である。我々の仕事は、学生の成長と地域や市民の成長を関係付けるということだと思う。私は、ゼミ生を外へ連れていくと時々、全く知らない方より「何々君は千頭先生のゼミ生なんですね」と挨拶されることがある。学生は市民活動団体で活動しているのです。普通は、「千頭先生のゼミ生の何々君」と言われるのですが、逆のパターンが時々あり、すごく嬉しい。学生が地域の中で行動する力や色んな人を巻き込む力は会社に入っても必要な力である。

知多半島の力

数年前、知多半島総合研究所で、国の特殊法人である総合開発機構（ＮＩＲＡ）の研究助成が通った。その際、地域の持続可能性の要素として、経済(Economy)・環境(Environment)・教育(Education)・公正さ(Equity)の4つのEを考えた。この視点から見ると、知多半島はすばらしい可能性を秘めている。例えば、ＮＰＯ法人地域福祉サポートちたの方々と知多半島の福祉系のＮＰＯの調査をした。知多半島には当時人口１万人に１つのＮＰＯがあり、全国的にみてもＮＰＯの数が多かった。そこで働く方の調査をした。結果からわかった特徴は、ＮＰＯで働く人の層が４つに分類され、社会の中での自分の立ち位置を模索している２０代の若者、自分達の仕事をしていると明確に言える意識を持つ３０代～４０代の女性たちが、仕事をしながら社会に関わっている意識を持っている。週3日でも3時間でも自分達にとっては仕事だと思っている層が確実にいたことが興味深い。それが知多半島を支える力だと思う。

地域間競争の弱点

８年ほど前に知多半島をエコミュージアムにしようと提案し、知多半島5市５町の広域行政圏計画のタイトルになった。知多半島の自然について後ほど報告があると思うが、知多半島には原生する自然はほとんど無く、人の関与で成立していた自然的な空間をどう再生するかが大きな課題である。そのため、さまざまな取組みが実施されている。また、昨年、伊勢湾の再生について、研究者･ＮＰＯ団体・漁業関係者などと議論を重ねたが、その中で指摘されたことは、伊勢湾の場合は、陸から入る汚濁物を減らして海の環境改善をはかるだけではなく、漁業を振興させて、有機物を栄養とする伊勢湾の魚や貝がきちんと経済的に利用して、環境改善をすることが大切であるという点だ。漁業関係者はこう指摘している。

知多半島には、一次産業と二次産業がきちんと共存しており、半島振興法の適用を受けていない全国でも数少ない元気な半島という特徴がある。しかし、地元に住んでいても、知多半島が持つさまざまな特徴やその良さに気づいていないことが多い。これは、これからの地域間競争という意味では弱点になりかねない。また、逆に地元がもっと真剣に取り組まなければならない課題もある。例えば、臭いの問題。半田周辺には中部国際空港関連の方々が住んでおり、１０年契約でマンションを借りているが、住んでみて、畜産廃棄物の臭いがあまりにもひどく、１０年後にはマンションの契約更改をしないとも言われている。

学生の教育と地域の発展

今日お話したように、学生は単に大学で学んでいるだけではなく、地域で調査や活動をすることによって、地域にいい刺激を与えることになる。宮田村では、学生たちが苦労しながら編み出した「３つのコミュニケーション輪」を発表したが、これが宮田村の村づくりグループの方々から良い評価をいただき、その後、これからも是非お付き合いをして欲しいとメールをいただいた。専門家や村の人から見ると学生の発表は非常につたない部分があるが、学生の目、よそ者の目が入ることは地域にとってインパクトがあると感じる。このような活動を通じて、最初にお話したように、学生も育つし、地域も少し変わる。学生が育つことと、地域が発展していくことは相互に関係しあっていると感じている。学生の学びは地域を発展させる一つの突破口だと思う。

いろいろな大学で○○学という講座が開設されているが、○○学の最後の目標は、単に郷土の歴史を詳しく学ぶことだけでも郷土の自然を詳しく学ぶことだけでもなく、最終的には大学での教育を通じて、学生と地域の両方を変えていけるかどうかである。それが、私たち研究者というか、少なくとも私の使命かと思っているので、今日はこの点をあえて問題提起をさせていただき終りたい。

実践報告①「知多福祉教育のフィールド施設・団体の紹介」

柿本　誠 社会福祉実習教育研究センター長

今日は、主に３点を報告する。１つめは、知多拠点施設・団体と覚書を結び日常的に学生が関われるように提携をしている点。２つめは、知多半島のＮＰＯ法人で、地域福祉サポートちたとその関連法人（事業所）について、３つめは、知多半島の後見支援センターの報告を行う。

知多拠点施設・団体（社会福祉法人）

名鉄沿線に学生にコストがかからないようにフィールドロードを検討している。その一環としてＮＰＯ法人や社会福祉法人からの協力を得て、知多半島の拠点施設としていつでもどこでも現場体験ができる（但し、実習教育研究センターと通じて）社会福祉法人の９法人と社会福祉協議会の５法人の計１４法人と提携を結んだ。提携した施設は、知的障害を中心とした愛光園、高齢者を中心とした一期一会、椎の木福祉会などがある。いつでも利用できる提携実習やフィールド施設を持つ大学は、全国的にはほとんど無い。

知多半島ＮＰＯ法人（施設）

サポートちたが中心となり５２団体のＮＰＯ法人が設置されており、その中で知多半島に２７団体が存在する。ＮＰＯ団体で中心的に活動している層が元主婦で使命感に燃えて地域を支えている。その関係で実習教育研究センターとも連携をとりセンターの学習支援室にはＮＰＯの配置の地図の大きなものを用意していつでも活用できる体制を整えている。

東浦町の愛光園の場合、建物は原則、１階か２階にあり、元牧場で広大な敷地があり先駆的に地域支援に取組んできた団体である。半田市の団体とは、本学の先生方も個別的に関わっておりますが、全体としての関わりは十分とは言えません。なぜ、知多半島に２７団体もの施設ができたのかは、日本福祉大学が関わっているからだと思う。それは、日本福祉大学が学生の対人支援力を高めるためにヘルパー研修を実施するようになり、その一部をサポートちたに委託した。そのことにより学生が研修費を定期的に支払うため、サポートちたの財源が安定化してきたのである。以前、名古屋大学がサポートちたを調べた時は、本法人はすごく財源がありコミュニティビジネスのモデルであると発表しているようですが、日本福祉大学の学生の一種の研修費収入もこのＮＰＯの財源に大きく寄与したことを認識していただきたい。本学もサポートちたへの事業の委託を縮小しないよう配慮すべきだと思う。

知多半島・法人成年後見センター

知多半島の５市５町が法人の成年後見センターを立ち上げた。その特徴は、行政とＮＰＯと大学等が一緒になって創り出したという点である。行政の協力は、５市５町が成年後見制度利用援助事業として。２４００万を本センターに委託。本センターが財政的にも持続可能な仕組みが立ち上がった。この成年後見センターのモデルは、東京の多摩南部センターや東濃後見センターです。知多地域後見センターは１月２５日にＮＰＯの認証がおりました。２月議会で了承されれば完全なものになる。理事長は、放送大学の大曽根寛先生です（筆者は理事です）。本センター長等には本学の卒業生が就任予定である。また、柿本ゼミ（権利擁護ゼミ）がインターンシップ的関係で本センターの日常業務の補助を行う予定で、本センターは４月１日からスタート。５市５町が連合で財政支援や運営支援をするのは全国でも珍しいものである。

まとめ

リベラルアーツの確立と実際のフィールドは、自分たちの生活と暮らしを振り返る一つの機会になる。併せて、フィールド実践は、ソーシャルワーカーとしての学びのスタートでもある。

実践報告②「知多半島における歴史系ﾌｨｰﾙﾄﾞﾜｰｸの試み」

曲田 浩和　経済学部准教授

千頭先生や柿本先生が話された現代とは違って歴史の世界は利害関係が見えにくい。本学学生は、専門的に歴史を学ぶ機会があまりないが、そのなかで、どのような形で地域と学生が関わっているかご報告をしたい。

古文書調査と道具調査

知多半島の地域史を考える基礎的研究として、２０年程前から、日本福祉大学知多半島総合研究所（知多研）が、内海船船主の古文書調査を行った。内海船は、尾州廻船のひとつで、全国規模で研究がすすめられ、高校の教科書に掲載される存在になった。最近、多くの教科書で内海船と記載されているが、内海船ではなく尾州廻船と捉えないといけないことが、古文書調査から明らかになった。

大坂－江戸を結ぶ廻船のほかに、蝦夷地－大坂を結ぶ北前船がある。北前船前船船主右近家の古文書調査も知多研で行った。福井県河野村（現南越前町）にあり、古文書調査の縁で、美浜の正門を登る坂の途中に河野村名産のスイセンが植えてある。他にも中埜酢店（現ミツカングループ本社）や常滑船船主瀧田家の古文書調査をおこない、この間の２０年調査・研究が知多研の歴史研究の基盤になっている。道具類は、内田家、中埜酢店、瀧田家を対象に調査を行った。１９９８年からはじめており、最初のうちは愛知県立芸術大学にお願いし、日本福祉大学の学生が雑用係として参加したが、しだいに調査に加わるようになった。そのなかのひとりが、現在、経済学部の同窓会委員をつとめている。道具調査は、学生の力で成り立っており日本福祉大学の学生が中心に活動している。このような成果は、瀧田家の展示や内海船の展示、ミツカンが開催した教科書１００年展につながっている。

地域との関係

現代ＧＰの『知多広域圏活性化に向けた学生の地域参加』「海の文化とものづくりＰＪ」の成果が、組織的に行った学生の地域活動の実践である。１年目は、南知多町ボランティアガイドの方々に地域を案内していただき、学生がさまざまな地域資源があることに気付いた。２年目は石造物調査を行った。神社の狛犬や鳥居など約１１０件の石造物を、部位毎に縦横高さを計測する作業を行った。調査前には、歴史的資源の大切さを学ぶ研修を行い調査に赴いた。ＰＪの成果を南知多町観光ボランティアガイドの研修会で報告する機会を得た。１年目に行った学生からの報告は、地域の方の生活を否定するような内容で、参加者の反応が悪いものであったが、「学生の感性で見るとさまざまなことがわかる」と評価された一言で救われた。２年目に行った石造物調査は、「これだけのことを学生がよくやった」と評価され、地域の方々の学生に対する見方が大きく変わった。その時、データをしっかり集め、基礎的な研究をすることで地域の評価が得られるのではないかと思った。地域の方々との信頼関係の構築が何よりも大事であり、さらに信頼関係を保つためには基礎的研究が不可欠である。知多研が行ってきた古文書調査、道具調査をベースに、さまざまな調査に日本福祉大学生が参加し、それらの成果を公表することによって地域の信頼が得られてきた。引き続き調査・研究を積み重ね信頼関係を構築することが必要である。

実践報告③「知多半島の里山をめぐる現状と問題」

福田 秀志　情報社会科学部准教授（講演当時）
（現　健康科学部准教授）

今日お話する内容は、知多半島の里山の変遷と竹林の広がりの現状と知多半島のキツネの生息状況と知多半島のどんぐりの木が危機にさらされているという３つの話題である。

美浜町の里山の変遷と竹林の拡大

美浜町の里山の変遷を空中写真で大学院生に解析してもらった。空中写真で古いものは米軍が撮影した戦後直後のものがある。１９４７年の状況をみると戦後の燃料不足のために伐採され禿山になり、１９６４年になると森林化するとともに、みかん園に転用される場所も増えた。１９８２年にはみかん園が拡大し、竹林が少し出現している。そして、１９９５年には竹林が大幅に増加する一方、果樹園は減反政策で減っている。知多半島の雑木林は竹林が増えており知多ソフィアネットワークでも竹炭づくりを通して、竹林の拡大を食い止めようとしている。竹林は、地下茎で拡大するため、栄養が地下茎にいく前の、夏季に３年間程度切ると撲滅できる。

知多半島のキツネ

童話『ごんぎつね』は最近ＮＨＫでも詳しく取り上げられ、多くの書店で本も並んでいる。研究室の学生が美浜町の里山でキツネをキャッチし、新聞にも掲載された。知多半島は、かつてはキツネの一大生息地であったが、昭和３０年代に絶滅したとされている。原因としては、土地開発や殺鼠剤を間接的に摂取したことが原因として考えられている。しかし、１９９７年に発見されたのを皮切りに知多半島の南北で見つかる。では、今どこで生息しているかを調べるため、知多半島の東海市、東浦町、半田市、南知多町で調べてみた。方法は、赤外線センサーをつけた無人カメラで撮れる。キツネのほかにタヌキ、イタチ、特定外来生物のアライグマなどがいた。特にキツネが多いのは南知多町だった。ただ、南知多町を除いた他の市町では丸々と太っているのに、南知多町のものは痩せていて、食べ物が不足しているのかもしれない。写真を専門家に観てもらったところコギツネと思われる個体が写っており、南知多町では繁殖も開始しているのではないかと思われる。

知多半島に迫り来る雑木林の大量枯死

今、知多半島のどんぐりの木が危機をむかえようとしている。その犯人は、カシノナガキクイムシ（通称カシナガ）と言う昆虫である。知多半島のどんぐりの木のほとんどは、落葉樹のコナラ、常緑樹のアラカシの２種類である。かつて、カシナガが大量の木を枯らす報告はなかったが、１９８０年代から、日本海側で木を枯らしはじめる。メスは、前胸背に穴が開いていてナラ菌というカビを持つ。ナラ菌が木の中に入ると木が抵抗反応して水が上がらなくなり枯れてしまう。愛知県でも２００５年に名古屋市の猪高緑地で発見、２００７年には知多半島の北部でも被害が発見され、東海市はひどい状況である。近い将来、知多半島中南部に被害が及ぶことは確実である。ナラ枯れは、１本見つかると翌年１０倍にその次の年には１００倍になる。皆さんのところでどんぐりの木が枯れていたらすぐに私にご連絡頂きたい。

「教養フィールドとしての知多地域の意義・あり方」～参加者の感想～

第１回きょうゆうサロン「知多学の夕べ」に参加しての感想

牧　洋子　社会福祉学部教授

第１回きょうゆうサロンの「知多学の夕べ」では知多半島という地域の特徴、歴史、里山の現状等が報告された。赴任して４年目になるが初めて体系だった周辺の地域の特徴を知る機会を得た。以下、印象に残ったことを述べたい。

（１）　地域から学ぶという基調報告では、海洋日本にたくさんある半島の中でも特徴を持った優れた地域であるとの言葉が印象深かった。赴任して初めて知った半島であるが、奥田・内海地域、半田の周辺を見て聞いて食して、尽きぬ魅力をかきたててくれる地域であることを実感している。

（２）　学生と共に地域に出かけていき、地域から学び、交流していくという実践報告は本学にとって今後さらに発展させていく可能性と重要性を感じた。現在、名古屋港周辺に学生とフィールド活動をしているが、学生は学内での知識や技術だけでなく地域社会の中で育てられ交流を通して成長していくことを実感している。今回のこの地域に生息する小動物、豊かな海洋資源や尾州廻船の歴史など、大学周辺の地域へ出かける取組みにも参加したいと大いに刺激を受けた。

実践報告を聞かせていただいた感想

吉田　直美　福祉経営学部准教授

今回の諸先生方の報告は、私にとって、大学があり、在学生の多くの生活の拠点となっているこの「知多半島」について、今までいかに「無知」のみならず「無関心であったか」という気付きを与えてくれました。同時に、実習拠点あり歴史ありキツネの生息あり雑木林あり…と、こういうのもフィールドワークっていうのだな、と興味深かった。自分たちが働き、学びながら生活している場について、自分で歩き、共に見て、聞いて、触って、話して、調べていく中でこそ、知的好奇心が育ち、地域の人々との信頼関係も形成しうることを、今回の報告は物語っているように思えました。教養フィールドワークの最大の醍醐味は、「何を知ったか」ではないのである。批評家でも傍観者でもなく、自分自身がその地域と人に関わる中で、気付きを得、知りたいことを見出し、伝えたいことをどう理解してもらうかを悩み、考える「自ら行動し、考える主人公」となるプロセスを体験することなのでしょう。

懇談会の食材「尾州早ずし」

懇談会の様子

３．第１回きょうゆうサロン連携企画
「知多半島ＮＰＯ現場見学バスツアー」
開催報告

教育資源としての豊かな可能性を持つ知多半島
ここには、地域の暮らしや福祉の諸課題を自ら解決しようと
取り組む市民がいます。
学生たちが地域の人々の多様な価値観に触れ
市民としての感覚を養い成長していくフィールドとして、
地域と連携した教育の新展開をはかるフィールドとして、
新しく広い意味での「ふくし」のフィールドとして、
地域の教育資源を見て、感じて、理解する・・・。
第1回きょうゆうサロンの連携企画として、バスにゆられながら、知多半島のNPOを巡りました。

開催概要

開催の趣旨と目的

この知多半島ＮＰＯ現場見学バスツアーは、地域の生活や福祉に必要なサービスや活動を創出してきた方々とふれあいながら、本学の教育フィールドを増やして新しい教育を作り出していくことを目的に、第１回きょうゆうサロンの連携企画として開催したものです。今回の協力団体である地域福祉サポートちたについては、５０を越えるＮＰＯ会員を擁する全国でも珍しいＮＰＯ中間支援組織であり、近年は行政と協働して市民活動センターを運営するなどその活動には学ぶべきことが多々あります。

今回訪問したＮＰＯは、広く地域の福祉や暮らしの中の諸課題を学び、地域の人々の多様な価値観に触れ、市民としての感覚を養うための教育資源として、それぞれ豊かな可能性を持っています。今回のバスツアーでは、その可能性について、教職員が深く認識することを目指しました。

開催内容

テーマ　：　知多半島ＮＰＯ現場見学バスツアー
開催日時　：　２００８年３月１２日（水）9:30～16:30
見学場所　：　知多半島内ＮＰＯ６法人を見学
主　催　：　主催－全学教育開発機構
協　力　：　特定非営利活動法人地域福祉サポートちた、知多半島総合研究所
内　容

9:30　美浜キャンパス出発
10:30　知多市市民活動センター見学（サポートちた）
10:50　ＮＰＯ法人 ゆいの会（知多市）見学
11:30　ＮＰＯ法人 だいこんの花（知多市）見学
12:30　ＮＰＯ法人 もやい（阿久比町）見学･昼食
（移動途中に建物外観のみ見学－りんりん、菜の花、ｔｏピア）
14:50　ＮＰＯ法人 ゆめじろう（武豊町）見学
15:50　ＮＰＯ法人 チャレンジド（美浜町）見学
16:30　美浜キャンパス到着･解散

参加状況

全参加者数　１９名

社会福祉学部教員5名、経済学部教員2名、福祉経営学部教員2名、情報社会科学部1名
実習指導講師1名、職員8名

開催を終えて

１日をかけて知多地域のＮＰＯを訪問し、移動時間でのレクチャーも含めてその活動を深く理解することができました。訪問したＮＰＯでは、設立から現在までの活動内容などが報告され、参加した教職員からは多くの質問や感想が寄せられました。その中には、「美浜町で卒業生がＮＰＯを設立し、活躍していることを知らなかった」と話される参加者もおり、知多地域のＮＰＯが本学にとって大変身近な存在であるとの認識が共有できたものと思います。また、今回の見学は、ＮＰＯが抱えている課題や利用者が施設を利用する理由・事情、本学の卒業生の活躍、本学の教員との協力関係などを目の当りにする良い機会になったのではないでしょうか。今回のバスツアーは、ＮＰＯの教育資源としての可能性について、教職員の認識を深めることができたといえます。

見学先①

知多市市民活動センター（特定非営利活動法人 地域福祉サポートちた）

住所　知多市緑町12-1
URL　http://www.cfsc.npo-jp.net/

美浜キャンパスを出発した一行は、まず、名鉄常滑線の朝倉駅近くの「知多市市民活動センター」を訪問した。ここは、行政と社会福祉協議会とＮＰＯが同じ建物に同居し、ともに市民活動を支えるという、全国でも珍しい先進的な取組みが注目を集めている施設である。今回のバスツアーのコーディネーターであるＮＰＯ法人地域福祉サポートちたは、ここに本拠を置いて活動を展開している。

ここでは、１階のＮＰＯサポートセンターや総合ボランティアセンター、２階の市民活動推進課などの施設見学を行った。また、サポートちた代表の松下典子氏より、このツアー全体の巻頭講演として、市民活動センターの概要とサポートちたのあゆみ、知多半島のＮＰＯのあゆみについてご説明をいただいた。

「知多市市民活動センター」と「地域福祉サポートちた」について

地域福祉サポートちた代表　松下　典子　氏

知多市市民活動センターのご紹介

知多市市民活動センターは、これからのまちづくりのための市民活動の支援拠点として行政が設置したものです。このセンターには、行政（市役所）の生涯学習課と市民活動推進課、ＮＰＯの事務局拠点、社会福祉協議会のボランティアセンター、公認ＮＰＯサポートセンターの事務所が同居し、市民活動の総合拠点となっています。また、ＮＰＯ法人である地域福祉サポートちたは、ＮＰＯサポートセンターの奥に事務所を構えています。市民の多くは、ここを行政（知多市）のサポートセンターと捉えているようですが、ＮＰＯが公共施設の中に事務所を置くということは、ＮＰＯ自体の信頼性を高めることにつながっているといえます。

市民活動を育成する場を提供

この施設内には飲食スペースがあり、その厨房をサポートちたが借りて、市民活動育成の場として市民に提供しています。このスペースでは、サポートちたのスタッフのコーディネートのもとに、料理好きな子育て中の主婦の方など、数多くの市民が日替わりでワンデイシェフとなり、自らメニューを考えて出店していただいています。センターの市民活動総合拠点としての役割の一端を担うとともに、行政や市民やボランティア活動の広がりをつくる原動力にもなっています。

また、行政・社会福祉協議会・ＮＰＯと、考え方の異なる団体が一箇所に同居し、共同事業「大人の学校」に取組んだことで、互いに深く学びあうことができました。サポートちたにおいても将来展望を議論する契機になったと思います。私たちはさらに深く協力しあい、さらに大学とも一緒になって地域活動や市民コミュニティづくり、地域福祉、在宅福祉を考えていきたいと考えています。

活動のあゆみとこれから

１９９０年代から知多半島の市民活動がゆるやかにつながり、今のサポートちたの組織の原型が出来上がっていきました。私たちは、介護保険制度ができる１０年も前から、在宅介護をはじめ暮らしを支える仕事をすすめているのです。全国で在宅介護の取組みがはじまった時には、既に仕組みをつくって社会に必要な仕事として取り組んでいましたので、介護保険制度については、生活者の立場からの検証ができると考えています。ＮＰＯのリーダーたちは、この制度をいかし地域に根付き、地域のニーズに応え、課題に取り組み、行政とともに動きはじめています。一方で、地方分権がすすんで自分達のまちの経営を自分たちが担うという流れになっていますが、まちの財源として必要になってくるのが地域福祉であり、社会保障関係の条件整備をすすめる必要が生じています。条件整備にあたって、ＮＰＯが制度導入前から取組みをすすめてきたことが大きな力になっていると思います。

私たちの活動は、これまでの蓄積を元に地域から必要とされ、自らも自信を深めながら、地域から信頼を獲得し発展してきたと思います。今後は、社会や地域を担う若者に、現場の体験や暮らし、働くということなど、生きる姿をトータルに学べる環境整備を半島広域にすすめる必要があると考えています。

見学先②

特定非営利活動法人 ゆいの会

住所　知多市新知字西屋敷21
URL　http://www.yui.npo-jp.net/

次に一行が向かったのは、同じく朝倉の駅近くのＮＰＯ法人ゆいの会。その建物は、廃業した繊維関係の工場を利用しており、天井には当時稼動していたと考えられる機械がそのまま残っている。また、出稼ぎに来ていた女工さんが利用していた部屋が残されているなど、地域産業の歴史をも感じることができる施設である。ここでは、福祉サービス事業、介護保険事業だけでなく、ふれあい事業としてさまざまな講習などを開催している。訪問した日も、地域の方々が集って、楽しそうに交流されていた。特に「さをり織り」の教室には、十数台の木製の織り機や何百種類もの色とりどりの糸、地域の方々が作った世界にひとつだけの製品が並べられており、大変印象的であった。

ここでは、まずゆいの会の解説ビデオを視聴したあと、代表の樋口禮子氏より、事業の拡大とそれに伴う施設拡大など、同会の発展とそれにともなうご苦労のエピソードも交えながら、以下のようなご説明をいただいた。

「ゆいの会」のこれまでの展開とこれから

代表　樋口　禮子　氏

１９９１年５月に、ゆいの会が地元の女性たちの手によって設立され、会員数４５名の簡単な介護事業からスタートして、今日の姿まで発展してきました。途中で、ボランティア活動を広げるために、会員の特技を生かした「さをり織り」を活動に取り入れました。「さをり織り」は、大人も子どもも、健常者も障害者も楽しむことができるものです。これは、その後、陶芸、絵手紙、紙すきなどのさまざまな活動へと発展する契機となりました。

この建物は、元紡績工場で、ノコギリ型の屋根がそのまま残されています。ここを借りた当時は、建物の一部のみの間借りでしたが、地域に事業内容が認知されはじめると会員数が拡大していき、駐車場確保など借用範囲を広げることが必要になりました。駐車場となったのは、工場時代に機械が設置されていた場所でしたので、床に油がしみこんで、当初はとても駐車スペースとして利用できる状態ではありませんでした。そのため、会員が集まって人海戦術で油の層を削り取り、砂をまいて整備をしましたが、今でも油の臭いが残っています。

２０００年には施設内の厨房「ゆい膳」でお弁当を作り、会員の自宅へ宅配する配食サービスを開始しました。また、介護保険が導入されるとともに、ゆいの会は介護事業所としての認定を受けることができました。このような取組が、地域福祉活動のモデルケースとして評価されはじめるようになり、今や地域に提供しているサービスは、高齢者や障害者のための食事づくり、家事援助、共働き夫婦のための園児学童の送迎、一次託児、移送など多岐にわたっています。会員数も４００名を目指して拡大を図っており、２００８年２月現在の会員数は３９３名となっています。サービスの制約がでてきたため利用者も協力者も減少となってきており、とくに 移送サービスについては、法改正によって介護認定や障害認定を受けている範囲で利用が可能といった制限ができ、夫婦共働き児童の送迎ができなくなって利用が１／３まで減少してしまっています。移送サービスの担当者は、車椅子の方を４階から降ろすこともあるなど、男性で体力のある方が望ましいのですが、条件が限られるため後継者探しにも苦労しています。今後とも、地域でのたすけあい、学びあい、 育ちあいの理念を継承できる人を育てていきたいと考えています。

（＊「結い」とは、田植えやなどの農繁期に農家が互いに手助けすることを指します）

見学先③

特定非営利活動法人 だいこんの花

住所　知多市八幡西水代100番地の1

３つ目の訪問先は、「だいこんの花」。閑静な古民家を改修して、２００６年６月に開所したばかりの施設である。古民家の落ち着きに加えて、部屋に飾られた雛人形がアットホームな雰囲気を醸し出しており、利用者の方々が喜んで宿泊されるというのも納得できる。また、代表の荒木智子氏のご子息は、本学経済学部の卒業生であり、現在この施設のスタッフとして活躍している。今回のツアーに参加された木全克己先生も理事として名を連ねているなど、本学との関わりも深い。

ここでは、高齢者の方々が大変楽しそうにこの施設を利用されている写真を拝見しながら、代表の荒木智子氏から、以下のようなご説明をいただいた。

「だいこんの花」の挑戦

代表　荒木　智子　氏

サポートちたのＮＰＯ法人起業セミナーを半年間受講し、最終的に、高齢者の介護保険事業を展開することを計画しました。当初は、小規模多機能（宿泊、ショートステイ）としての事業展開を希望していましたが、法律が改正されて、１人当りの面積不足や定員の問題で、開設ができませんでした。そのため、介護保険で訪問介護、ディサービスの事業を展開し、宿泊はたすけあい（ＮＰＯどうしの相互協力）という形で実現させました。建物は築８７年の古民家で、当初は天井から空も見えるし、床も抜けていました。さいわい大家さんの協力が得られて屋根を改修することができ、あとの改修費については色々な補助金を確保して、やっと開所に至りました。

この「だいこんの花」での宿泊利用は、家族が介護に疲れた時や家族で旅行をする場合などにあずけられるといったケースになります。施設に入所されている方が、だいこんクラブ会員になり、昔ながらの畳部屋での生活がしたいと言っては、宿泊利用して喜んでいただいているケースもあります。介護保険でディサービスに来てから、安心して泊まっていただいています。

利用者の方は、この古い家は自分が育った家のようで安心感があるとおっしゃいます。家具などは、利用者が使っていたものを再利用しています。中には石臼と杵を寄贈いただいた方もいて、餅つきを楽しませてもらっています。そこに壁紙が貼ってありますが、Ａ４サイズを利用者がひとりずつ貼っては、ひとつの絵にしているものです。はじめは、小さなものでしたが、皆でひとつのものを作ることが励みになっています。これを発表する機会が欲しいですね。

スタッフは、今ここにいる３人の他に１８人います。ボランティアの方には、可能な範囲で関わっていただいています。これまで２年間運営をすすめる中で、ＮＰＯはやはり人が財産であると感じます。今、やっと税金を納めることができるようになり、世の中に参加できるようになりました。地域の方に支えられてここまで実践することができたことを感謝しています。

見学先④

特定非営利活動法人 もやい

住所　知多郡阿久比町大字卯坂英比16
URL　http://www.cac-net.ne.jp/~moyai/

次の訪問先は阿久比町の「もやい」。ここでは、昼食を美味しくいただきながら、お話を伺った。訪問した際には、１０名ほどの利用者の方がいらっしゃった。皆さん、大変お元気なご様子で、参加者に質問をされたり、木全克己先生の指導で簡単なレクリエーションをしたりと、和やかな交流も行われた。

ここでは、代表の安井洋子氏より施設で抱えている問題などを中心に、以下のとおりご説明をいただいた。

「もやい」の抱える問題

代表　安井　洋子　氏

訪問介護を中心に障害者支援、たすけあい在宅支援、子育て支援、移送サービスなど、個人の車を持ち込んで対応しています。阿久比町には名鉄以外の公共交通機関がないため、行政から初乗りのタクシー券が年間３０枚支給されます。県内で最初に移送サービスに取り組みましたが、今は申請書を提出して書類上の不備がなければ許可がおりるかたちとなっており、この阿久比町ではもやいだけがサービスを提供しています。色々なサービスの中、一番リスクの高いのがこの移送サービスで、年々、理解を得ることが難しくなり協力者が減少しています。一昨年は、２０台～２５台の車を使っていましたたが、今は車１０台程度に運転手１１人の協力が得られているのみです。

私の住んでいる集合住宅には約３００世帯あり、そのほとんどは６５歳以上の世帯です。土曜日は、知的障害のグループホームにいる人達が数名利用されることもあります。ですが、たすけあいの事業として送迎・昼食・おやつを含め１５００円の料金設定だったのを、４月から２０００円にせざるをえなくなり、そのお知らせを先ほど発送したところです。

もやいは、特に宣伝もせず口込みで事業を実施してきましたが、来年度は情報発信のためのキャンペーンを組んで、打ち出していこうと考えています。今、コンピュータ関係で支援いただける方を探しています。ホームページは、５年間も更新できていませんが、「もやい通信」についてのみ、商工会の方が気の毒に思って、更新していただいています。コンピュータ関係は、どこの団体も一番不足している点ではないかと思います。

阿久比町に、４月から子育て支援センターが開設されますが、職員１人と臨職１人で相談業務を実施することになっています。いったい何が望まれているのか、行政とも情報交換をおこないました。一次預かり事業に取組むのであれば、役場で職員を抱えるよりも、臨職の代わりにもやいから必要な人材を投入することで、コストが軽減できると提案しました。私達が取組むディサービスは、先輩方が作り上げたものです。サロン形式のディサービスを編み出していただき、私達もそれを継承することができました。お年寄りにとっても良いものであり、介護予防にもつながると考えています。この方式をどなたかが、研究材料に取上げていただければと思います。

愛知県は、介護保険、子育て支援等の日程を分けないと事業所として指定されません。もやいは、指定を受けていないため利用者が支払う利用料で完結しています。このような取組みをしている施設には、税金の免除、家賃、事務局員費１人分の支援などを行政からしていただけると、もっとこのような施設が増えるのではと考えています。１２年目になりますが、行政からは１円たりとももらっていないということが自慢の種です。だから、言いたいことが言えるのです。

見学先⑤

特定非営利活動法人 りんりん、菜の花、Toピア　（外観見学のみ）

りんりん　住所　半田市岩滑高山町5-4
URL　http://www.chitanet.or.jp/users/10010739/

菜の花　住所　半田市平地町4−140
URL　http://npo-nanohana.com/

toピア　住所　半田市春日町3丁目10-2 ふらっと2F
URL　http://topia-handa.hp.infoseek.co.jp/

次は、サポートちた代表の松下さんに解説をしていただきながら、半田市内の３法人の施設について、バスから外観のみを見学した。「りんりん」は、新美南吉の生家の近くにある総２階の新しくて大きな建物である。「菜の花の家」と「toピア」については、半田市内の住宅街にあり、１階部分に菜の花が２階部分にtoピアが同居した施設になっており、２つの団体の現場が連携していることが特徴的である。

3法人の概要について

地域福祉サポートちた代表　松下　典子　氏

りんりんは、総工費約４２００万円の総２階の建物で、法人独自で無借金で建設されています。建物内部は、１階部分が交流のスペース、２階は全て事務所です。ここで働いている方は、女性が多く子育て中でも仕事ができるように保育室も設けてあります。
事業内容は、介護保険の在宅支援プランの設計や訪問介護、ディサービスが行われ、岩滑町の他にもう１拠点がありディサービス事業を展開しています。また、この４月から岩滑小学校の学童保育をはじめることになっています。

菜の花は、半田の住宅街の一角に小規模多機能の地域密着型の施設を２年前に設置しました。ここは、１５人対応の介護保険を展開している組織で、３人のショートステイができ、制度上の基本機能よりひとまわり小さい小規模多機能の施設になっています。

toピアは、菜の花がある建物の２階にあり精神障害者の方々の就労訓練の作業ができる居場所になっています。短時間の仕事であれば取組むことができる施設利用者が、菜の花の昼食時のお手伝いやディサービスを担っています。このように菜の花とtoピアが、機能的に連携を取り、良いかたちで活動が展開されています。

見学先⑥

特定非営利活動法人 ゆめじろう

住所　知多郡武豊町大字富貴字外前田21-5
URL　http://www.yumejirou.org/

次の訪問先は、「ゆめじろう」。愛知用水の関連施設だった建物を活動拠点として利用。ゆめじろうは、知的障害者の活動の場として武豊町町民会館内に喫茶店を経営している。施設に入ると武豊町町民会館でも売られているワッフルを焼く甘い香りが漂っていた。他に施設内では、駄菓子も売られており、説明が終了してから買い求める参加者もいた。

ここでは、理事長の出口晋氏より常設の説明用パネルを囲み、以下のとおり業務内容等のご説明をいただいた。

「ゆめじろう」が取組む事業

理事長　出口　晋　氏

私には、知多半島の東浦町にある事業所で相談事業を担当していた時から地域格差がはっきり見えていました。障害者や高齢者の問題、次世代育成に関わることも一緒に進められると良いと考え、地元の武豊町４万人規模の町を対象に色んな切り口でサービスを展開することをイメージしていました。

福祉サービスの課題として、ニーズは高いがサービス側の専門性が担保できないことがあり、それを何とかカバーしたいという想いがありました。ゆめじろうは、医療行為が伴う障害者支援や高齢者その人にあったプランを計画できるなど、身近なところで専門性を確保することをコンセプトとしています。平成１５年４月に事業をスタートし、相談業務、社会参加促進事業、ホームヘルプ事業、行政との共同事業等を行っています。平成１５年当初は、相談事業の委託は受けていませんでしたので、手弁当で相談を行っていましたが、昨年１０月からは武豊町や美浜町から委託を受けて障害者の相談を実施しています。また、高齢者の相談は、武豊町の地域包括支援センターにスタッフが出向するかたちで、行っています。

障害者間の人間関係が一旦崩れてしまい、しかも地域に一つしか施設が無ければサービスを利用しにくくなります。こういった方達もヘルパーの個別支援として対応してきましたが、障害者に通う場や集まる場を提供することは地域活動支援センターの一つの機能になっています。同じようにオープンスペース事業として「やっとかめ」があり、週１回集まって食事や外出をしています。もともとは、介護予防としてはじめましたが、年月が経ち要介護の方ばかりになってきたのでディサービスも展開しなければならない時期に来ています。

「ゆめっこ」と言う子育て支援活動は、武豊町の子育て支援センターがすすめる大規模な活動が苦手な親子のニーズを中心に拾っています。武豊町町民会館の喫茶店は、ゆめじろうがワークシェアリング方式で運営しており、後々、高齢者の方や障害者の方が働ける場所を提供しようと考えています。また、武豊町の総合計画の障害者の働く場所の設置という形で寄与します。今後のゆめじろうには、福祉の計画が動く中で、行政のコンセンサスを得ながら誰もやれない部分に取組むという道もありますし、こんなニーズがあるだろうと自分達で主体的に事業をすすめていく道もあると思います。福祉業界は人材不足で厳しい運営しており、若い優秀なスタッフが集まりにくくなっています。かつては学生のヘルパーさんが比較的たくさん来ていただき、障害者分野の老舗に就職する道筋ができていましたが、これも途切れつつあるという印象を持ちます。非常に面白い仕事でもあるのでこのことを伝えるのも私達の仕事だと考えています。

見学先⑦

特定非営利活動法人 チャレンジド

住所　知多郡美浜町奥田儀路272番地
URL　http://challenged.yh.land.to/

最後の訪問先は、「チャレンジド」。美浜町を拠点に本学卒業生により設立されたＮＰＯである。２００７年には古民家に拠点を移し、地域に密着した新たな事業を展開している。本学に入学している障害者からの相談も受けるなど精力的な活動を展開している。スタッフは、ほとんどが本学卒業生であり、今回のツアーに参加された石川満先生も理事として名を連ねている。

ここでは、本学卒業生でスタッフの石川亜紗美氏よりこれまでのあゆみなど以下のとおりご説明をいただいた。

「チャレンジド」のあゆみと地域からの要望

スタッフ　石川　亜紗美　氏

チャレンジドは、美浜町を中心に障害者の生活支援に取組み、障害当事者が主体となって、共に学び共に生きることのできる地域づくり目指しています。取組んでいる事業は、ホームヘルプサービス、移送サービス、啓発活動などです。親御さんや障害を持っている当事者の座談会や学習会、交流会など障害当事者ならではの生活情報の発信にも力を入れています。スタッフは、事務局に４名、ヘルパーステーションサービス提供責任者と管理者がいます。その他に理事が５名、登録ヘルパーが約２０名（日本福祉大学の学生が８割）います。ヘルパーステーションサービスの利用者は、現在３３名になります。

障害を持つ学生は、学外生活保障からはじまり生活面でボランティアに頼らざるを得ない状況にあります。生活面でのサポートが必要な場合は、自己努力で切り開く必要がありそれを何とかしようと考えたのが、このような取組みをはじめるきっかけになります。私達は、学生生活の中でサポートを付けることが、障害学生にとって重要と考え、障害学生が主体となりサポート体制の確立を目指し、２００１年に任意団体チャレンジドを立ち上げました。２００３年には、ＮＰＯ法人としての認定を受けました。最初の活動は、知多半島の店のバリアフリー調査や障害を持つ学生の生活実態や困っている点からはじめました。調査結果から、改めて障害を持つ学生の生活のしづらさが浮かびあがりボランティアの生活にあわせないと生活できない実態が見えてきました。また、支援費制度の導入にあわせその制度を使ったヘルパー派遣が可能か検討し、２００４年にヘルパーステーション事業をアパートの一室を借りて開設しました。ヘルパーステーションは、障害学生の支援を中心に想定していたのですが、活動をすすめる中で障害を持つ学生だけではなく地域の方から「家族の支援が大変」、「美浜町のサービスを利用したくてもサービスを提供してくれる施設がないのでチャレンジドを利用したい」「障害者も気軽に集まることができる場所が欲しい」と色んな声が寄せられるようになっていきました。そんな中で地域に拠点を持ちたいとの想いが強くなりました。幸い去年、この古民家を借りることができ、拠点を移動しました。段差など改修が必要ですが、ここの活用方法をよく考え、この拠点を障害の有無に関わらず集える場所にしたいと思います。

チャレンジドは、美浜町に生活基盤のある方の生活支援と障害学生の自立生活を学ぶ場所という役割を認じて、さらに地域に根ざした活動を目指していきたいと考えています。

参加者の感想

◆全般
・いずれもそれぞれの環境・条件の特長を活かしながら、緩やかに前に進んでいること、個々の財政面での厳しさなどを実感。何よりもそこで働いておられる人達に脱帽です。もっと広報が必要ですね。
・みな大変。もっと事業の仕組みづくりを考えなおす必要がある。きっちりとコンセプトを社会に発信してください。
・どのＮＰＯ法人も設立、運営に苦労されている事がよく分りました。今回を機に個人として何か関わる事ができないか考えていきたいと思います。

◆ゆいの会
・色々な活動をされているのですね。資料で見るだけでなく、やはり拝見しますと感じるところがありますね。特に「さをり織」の作品を拝見しますと、作られた方がたいへん楽しんで取り組まれている事が伝わってきます。
・配食、工房等を含めて多面的な助け合いの仕組みが出来上がっていることには感心しました。
・元工場の建物を十二分に活用し（地域の歴史の上に、新しい歴史を作っているイメージ）、多世代に関わる事業展開が印象的。

◆だいこんの花
・男性職員の方も働いておられた。生計をたてられる給料がなんとか支払えているのは、ＮＰＯとしてはすごいと思った。
・地域に密着し、地域に溶け込んでいる小規模施設の一つのモデルのように思いました。
・本学経済学部の卒業生が生活指導員として活躍していることは大変うれしい。

◆もやい
・利用者の皆さんともお会いでき、大変お元気な姿に驚きましたとともに、スタッフの皆さんの快活さがとても印象に残りました。おいしいお食事をいただきありがとうございます。
・お食事がたいへんおいしかったです。利用者がいるところをお邪魔しましたが、利用している雰囲気が伝わったので良かったと思います。
・制度の枠に入りきらないサービスにきめ細かく対応しておられるところに、住民にとって本当のサービスとは何かを考える原点があるように思われました。

◆ゆめじろう
・サービスを受ける人・必要な人をくまなくとりこんでいく姿勢がよくわかった。
・行政との関係性のお話が大変興味深かったです。それぞれの地域の特性をふまえないといけないというお話は学生にも聞かせたいと思います。
・出口氏の話で「ＮＰＯは気づいた人が気づいた人の責任で行う事が原点」という点は参考になる考え。

◆チャレンジド
・大学にとても近いので、もっといろいろな連携が結べそうですね。来年、再来年の知多半島をテーマとした新しい科目を作るときにはご協力いただければ。
・卒業生を中心に大学の近くで活動しているので、大学の障害学生支援センターとの連携を深めることなども考えてもらえると良いと思いました。
・美浜キャンパスの近くにありながら、卒業生の活躍するＮＰＯをほとんど知らなかったため、いい機会となった。

４．第２回きょうゆうサロン
「表現者は学ぶ」開催報告

演劇、スポーツ、情報、音楽、芸術、ことば・・・
大学の授業や課外活動、生活の中には
さまざまな表現の機会がある・・・
表現のプロセスは、人の可能性を引き出す鍵
表現は学生にどんな道を拓くのか
第2回のきょうゆうサロンは、
学生の軽妙な漫才にはじまり、
これまでの検討状況を振り返り、
多彩な教育実践の報告を受けながら、
大学教育における表現の可能性を探りました。

開催概要

開催の趣旨と目的

第２回きょうゆうサロンは、「表現」と教育をテーマとして開催しました。学内外での音楽活動やスポーツ活動、言語表現、課外活動における表現など、学生たちは４年間の学び中で、「表現」へのさまざまな取り組みを行っており、教養教育の観点からも見逃すことのできない要素であるといえます。「表現」を題材にしたユニークな教育実践に取組む先生方からの報告を受け、教育資源としての豊かな可能性について情報を共有するとともに、これを教育活動にさらに活かしていくことを目的としました。

開催内容

テーマ　：「表現者は学ぶ」－「表現」はいかに教育を豊かにするのかー
開催日時　：２００８年５月２２日（木）18:00～20:30
開催場所　：美浜キャンパス教員第1控室（教員ラウンジ）
主催・協力　：主催－全学教育開発機構／協力－北信越地域ブロックセンター、
知多半島総合研究所
司　会　：谷地宣亮 経済学部准教授･全学教育開発機構員
内　容

18:00　学生漫才「教育」　サーキット（社会福祉学部４年鈴木祐哉さん、鹿見勇輔さん）
18:05　挨拶　木戸利秋 全学教育開発機構長
18:15　基調報告「表現」するキャンパス作り
～回想、２００６年時点の「初年次教育」「教養教育」改革答申の発想～
（教育改革推進委員会第１WG報告）
上田和宏　経済学部教授
18:45　実践報告
①「身体で語ることば」　伊勢田亮　子ども発達学部教授
②「学生の活動をfuxiで観る」　佐藤慎一　国際福祉開発学部准教授
③「舞台を学外に拡げた学びつくり」　小木美代子　社会福祉学部教授
19:30　質疑応答・懇談（軽食を交えながら）
20:30　終了

参加状況

全参加者数　４８名（報告者含む）
社会福祉学部教員7名、経済学部教員6名、福祉経営学部教員7名、子ども発達学部5名、
国際福祉開発学部2名、通信教育学部教員3名、非常勤講師1名、職員17名

開催を終えて

本学の教育改革への取組みの中で「表現」というキーワードが提起された経過や福祉・情報・社会教育等の領域での「表現」に関する教育実践事例が報告されました。参加者からは、「授業の中での学生の反応はどのようなものであったか」といった質問が寄せられ、表現を通した学生の成長に対して高い関心が寄せられました。他にも、授業で教員のパフォーマンスがあると楽しく学べるといった意見が参加学生から出されるなど、教職員と学生の間で教育について意見を交わす機会ともなりました。「表現」の教育資源としての豊かさや可能性について情報共有するという目的については、成果をあげたものと思います。

また、第１回のきょうゆうサロンに引き続き、複数学部からの多様な報告と軽食を交えた懇談を通して、教員間での教育実践事例の共有、学部を超えた交流をはかることができたと考えます。なお、報告の中で、学内SNSを舞台にした学生の学びの有様やその成果が、彼らの努力･苦心する姿なども交えて紹介され、学生が実際にどのような学びを展開しているか認識することができました。これも先回と同様に、大きな成果であったといえるでしょう。

基調報告「表現」するキャンパス作り

～回想　２００６年時点の「初年次教育」「教養教育」改革答申の発想～
（教育改革推進委員会第１ＷＧ報告）

上田　和宏　経済学部教授

少し前に「きょうゆうサロンで報告してください」と全学教育開発機構長より依頼がありました。今から２年前の２００６年の教育改革推進委員会の答申の内容をご報告します。今日は、当時なぜこんなことを考えたのかを紹介します。当時の問題意識と「表現」をキーワードにした教養教育や初年次教育のアイディアがどのように生まれてきたのかについてです。各学部での教育改革検討の際の参考にしていただければと思います。

掲載資料は、教育改革推進委員会のワーキンググループでの議論結果や戦略的なプログラムの検討資料、最終報告の基礎的なメモを準備しております。

「表現」がキーワードになった経過

ワーキンググループが始まった段階では、「表現」というキーワードは出ておりませんでした。その後の議論の中で「表現」という言葉が出され、スポーツや幼児教育がご専門の先生にその視点で「表現」についてメモを作成していただきました。このメモを題材に最終的にまとめたのが最初の資料です。ワーキンググループの課題は、初年次教育や教養教育の改革でした。本学の歴史においても教養教育の在り方は、あちこちに振れてきました。教養と専門が切り分けられていた時代から入学してすぐに専門をという流れになりました。しかし、やはり最初は教養が大切だとか、初年次教育は大切だという議論に９０年代後半からなったと思います。われわれの課題は，その中で、本学の教育改革は、どのように進めるかという話でした。ただ，議論を始めるとすぐに、「今の大学生は」という話になっていきます。資料には到達点と記述していて（１）と（２）はパラレルであるのですが、問題意識は、最初（１）の方からだったのです。自主性や自立性、リーダーシップが欠け落ちているのではないかというところからでした。

学生の自主活動として、例えば、本学でも自治会や大学祭の実行委員会等がありますが、そうした組織も成立しにくくなってきたということが言われるようになっていました。それまでもそういった学生たちによる自治機能を改善すべきではないかという声は聞かれましたし、ワーキンググループでもそのような意見が出されました。教養教育や初年次教育と一見関係がないようにみえますが、どうしても学生の自主性や自立性の議論になってしまいます。ですから、さまざまなプロジェクトを企画して育てるしくみを作り，学生達に動いてもらうことを教育の中に取り入れる必要性があるのではないかという方向に議論はむかいました。それが、資料の後ろにあるメモのことなのです。もうひとつの問題意識として、大学に活気を持たせることがありました。本学には異なる学部の学生を混ぜ、交流することで、学生達の目が色々な方向に向き、学生同士で刺激し合い元気になるという考え方が強くあります。さまざまな場でそのような考え方が示されます、ただ、「そんなことして面白い？、意味がある？」と私は必ず言います。単純に学部混合クラスを作れば良いという発想は、危険だと思います。学部混合クラスは、それなりの準備や装置、道具、しくみ、それを仕切る覚悟がなければいけないと考えています。ただ混ぜれば良いという乱暴なことはやめた方が良い、と、とりあえず言うことにしています。

これらの問題意識のもと議論をしていると、結局、自分を表現できる学生が少ない、表現できないと元気がないように見える、言いたいことが言えない、表せないことを通して悪循環に陥っているのではないかというところに意見が落ち着いてきたのです。資料に「教養教育のひとつ柱として学生がいきいきとした自分を見つめることを支援することを重視すべき」と書いています。いきいきと自己表現できる取組を考えてはどうかという話になってきたのです。スポーツ自体、身体表現と捉えることができるということがワーキンググループのメンバーの先生から伺いました。そこで、他にもどのような〇〇表現が利用できるかと考え始めたのです。そう考えると、初年次教育や教養教育のカリキュラムの柱として「表現」をキーワードにすることで可能な取組が多くあると考えられました。

経済学部での取組と関連して

現在の経済学は、理論面では論理的に内容が積み上げられ展開されており、真面目に取組むと学生はとても大変だと思います。経済学部はこうした教育をきちんとやっていこうと考えています。しかし、他方でこれとは反対のものが必要だとも考えました。経済学とは異なる評価軸でとらえられることを学ぶことが必要だと考えていました。そこで音楽の先生や美術の先生に相談し、「芸術表現」という科目を立ち上げたのです。先生方は、学生が自由に取組める状況をつくり、学生の持っている力を引き出そうという発想をしていました。ワーキンググループでは、そんな取組みを他学部でも作れないかと考えました。資格を取得するために一生懸命勉強する学生達にもそうした学びも必要ではないかということでした。

それでは、表現の取組みをどこまで拡げることができるか、実施可能か否か。われわれはアイディアを集め、「表現」に関わるカリキュラム（科目群）を準備し副専攻的に置けないかと考えました。活動する場は学内にあります。例えば、あまり利用されていない文化ホールや展示場、茶室を使って学生達が成果を発表することが考えられます。最近、12号館の入り口に学生が描いた絵を展示しています。こうしたことは積極的に取組むべきです。学内の空間をうまく使えば、さまざまな活動を昼休みに日替わりでみ見てもらう場所もあると思います。しかし、他方で時間割の作成一つとってみても非常に難しい問題があることも事実です。その点は報告書に書いておきました。

経済学部では、ＧＰ採択に伴う地域研究の活動が契機となり学生が発表する機会が増えてきています。個人的には、学生、教員ともに学外に何かを発信していく体質に変えたいと思っています。昨年、広報用に３年生の女子に記事を書いてもらい、Nippuku Womanという冊子を作成しました。学生達には、自分の名前が出た冊子を色々な人に読んでもらうことを快感に思ってもらえたらと考えました。こうしたことを仕掛けることを細々と実行しています。

実践報告①「身体で語ることば」

伊勢田 亮　子ども発達学部教授 全学教育開発機構員

これから担当しています障害児教育方法論という科目における身体表現の実践についてご報告申し上げます。まず、イメージを持っていただくために身体表現に取組む学生のビデオを見てみます。　　＜ビデオの視聴＞

１９９６年にこの大学に赴任して、社会福祉学部の学生達に教えた時、理論的に優れているが表現力が弱く養護学校（当時）の教師になった時に言葉のない子供達から言葉を引き出すことができるのだろうかと率直に思いました。障害児指導法の講義をおこなっても実践につながらず養護学校ですぐ役に立たない状態で、記憶しているが身体に出せないため教育実習に行っても障害のある子供の教育ができないのです。子供達が何を表現し、何を語ろうとしているのか掴めないのです。学生達は、言語で物事を考え、一方、障害のある子供達は、動作や身振りなどの感覚的な世界に住んでいますので、ここに大きな格差が生まれ随分苦労したと思います。１９９０年代後半の学生の学力は、非常に高く、知識や理論が先走り障害児教育でも社会福祉という側面から、多様な議論ができ、さすが日本福祉大学の学生は優れていると思いました。他方で、行動できないことが問題であると感じ、２０００年にご覧いただいたような身体表現を約１５時間分の指導の流れを伊勢田メソッドとして考案しました。身体で語ることは、養護学校教諭としての表現力が求められ、表現力がなければ子供の表現を引き出すことができないのです。教師が語らずして子供に語らせることはできないのです。身体表現を通して教育実践の方法を身体で学び、身体で覚えなければとても障害児の指導はできません。この２つの観点から身体表現プログラムを考え、毎時間繰返し実践しているリズム運動で、走る、スキップ、ギャロップ、よつばい、蛙、ごろごろ、走る、歩く動作を色々なイメージにのせておこなうのです。ピアノのリズムに合わせ、歩く時はトトロの唄に合わせ、走る時は、何か動物になり、ギャロップは、馬、よつばいで熊、蛙飛び、骨盤を軸に芋虫のようにころがり、走るところに戻ります。東京芸術大学の野口先生が考案した体操は、舞台芸術者のための体操で、身体を開放し自在に身体を動かすように筋肉の緊張と弛緩をつくります。そして、毎時間のテーマに沿って最初は、呼吸法、次はイメージの世界に遊び、全く言語を使わず身体の動きだけで表現する体験をします。無対照行動といい、物を使って行動し、物を使わず行動します。例えば、長縄を使って縄跳びをし、次にイメージだけで縄の無い縄跳びをする。我々は、言語、概念の世界にいますから、物がなくなった時に同じように動作することが難しくなります。地上６０階からエレベーターに寝転がり目を閉じて降りてくる体験をします。ここで、補助者をつけ背骨のＳ字のへこんだ部分に手を入れてもらい暗示をかけて地上まで降り１階にくると背骨が、まっすぐになるのです。つまりイメージにより身体が自在に動く体験をします。もちろん学生は、びっくりして魔法にかかり身体表現はすごいと感じるのです。他には、５人ぐらい並べて背中に言葉なしで呼びかけ、呼ばれていると感じた人に手をあげてもらう一種の遊びです。でも時々当り、呼ばれたと感じた人の背中が熱くなったり痙攣したりするのです。つまり、後ろにいる人の気配を感じとる力をつけて養護学校で後ろにいる子供が逃げていった時に応用できるように暗示にかけているのです。先程のビデオのような世界に引き入れているのです。童謡の世界を遊びとうりゃんせをはじめて身体表現します。まず、解釈からはじめ子供の世界に戻り実践してみるのです。それから、３匹の山羊の世界、風と木の世界、最後に３コマを使い音楽の世界を身体表現しています。学力と表現力は一体になっていますから学力が低下してくると表現も質が低下してきます。１９９０年代の学生の表現の質は、高いですが、２０００年以降は、だんだん身体が動かなくなる現象が見られています。

実践報告②「学生の活動をｆｕｘｉで観る」

佐藤 慎一　国際福祉開発学部准教授

個々の活動をつなげて成果をまとめる

国際福祉開発学部所属で教育デザイン研究室のセンター教員を担当しております佐藤です。よろしくお願いします。本日は、「学生の活動をｆｕｘｉで観る」として、昨年４月から全学的に運用が開始された学内SNSを用いた実践について報告いたします。私は、２００５年４月に本学に赴任した際の新任教員研修で、本学が実習やフィールドワークといった活動に精力的に取り組んでいるということを伺いました。こうした活動では、最終的に、学生にレポートを提出させることが多いと思いますが、最後のレポートだけでなく、情報ネットワークを利用して、活動のプロセスについても記録させ、情報共有や意見交換を促進していきたいと考えたのが実践の原点です。SNSのポイントは、非常に簡単に言ってしまうと、個人ごとに日記を記録することができ、それらに対して相互にコメントができることです。ただ、個人ごとに記録された日記をすべて見て回るのは大変であるという側面もありますので、複数人の日記を過去一定期間に渡って、効率的に見て回れるようなシステムを試験的に開発したりもしています。なお、ｆｕｘｉは、２００７年度４月から全学で運用がはじまり、昨年度利用状況は、１万人以上の利用対象者のうち、アクセスしたことのある人が半数程度、プロフィールまで登録している人が２０％程度、定常的に利用している人が１０％弱、といった感じでした。

ｆｕｘｉを活用した取組みと効果

ｆｕｘｉは、台湾自主研修や基礎演習などの体験型の学習で、活動のプロセスを文書で記録する、ということに試行的に活用しました。電子掲示板と違って、日記風に、個人毎に記録ができるため、気軽さがあるのか、想定した以上に利用されました。例えば、台湾自主研修は、現地大学生とチームを組んで、英語でプレゼンテーションを行うことを核とする活動なのですが、そこでの記録を、実際にｆｕｘｉのデータを見ながら紹介したいと思います。まず、キックオフミーティング後の決意表明がされて、徐々に、プレゼンテーションに関する打合せなどの活動内容が記述されるようになってきて、それに対して、参加者同士や、参加はしないけど活動に興味をもっている学生たちとの間で、コメントのやり取りも多く見られます。お互いが励ましあうようなやりとりも結構見られます。台湾での活動を終了して帰国後には、レポートとは別なんですが、活動をしっかりと振り返った、比較的長い文章が投稿されていたりもします。また、別の事例になりますが、基礎演習で「福祉と経営」というテーマで調査に取組んだ学生が、授業での発表とは別に、自分自身のまとめとして結構長い文章を投稿しました。これに対して、通信教育部で学ばれている関連分野の現職者の方々から、非常に詳細なコメントがいくつか寄せられたりもしました。取り組みはじめたばかりで、活用効果のしっかりとした評価はできていませんし、課題も色々あるとは思いますが、可能性も大いにあるものと感じています。今後も、継続的に活動を進めて知見を貯め、よりよい活動を目指していければと思います。なお、現代ＧＰの関連で教育デザイン研究室のページからこうした取り組みに関連した文書やビデオを紹介していますのでお時間がございましたら是非ご覧ください。（http://www.n-fukushi.ac.jp/idlab/gp/）

実践報告③「舞台を学外に拡げた学びつくり」

―美浜町をフィールドにして―　　**小木 美代子　社会福祉学部教授**

共同学習と記録化の重要性

最後にご報告させていただく小木美代子です。現在は社会福祉学部に所属し、「子ども文化論」と「社会教育課題研究」を担当しています。前者は半期の２単位もの、保育士資格などに対応しています。後者は社会教育主事任用資格の総まとめの位置にあたる科目です。ということで、どちらも実践的な性格の科目ですので、それを意識して、「子ども文化論」では授業の最後の数分を使って手作りのおもちゃを作って遊んだり、「社会教育課題研究」では、フィールドワークを取り入れて学外に出て学習したりしています。とにかく、本学の学部改組やカリキュラム改革は凄まじく、カリキュラム構造が大幅に変更になり、教員の担当科目もコロコロと変わるので、その都度、試行錯誤を重ねて授業作りに挑戦せざるを得ず、今のような内容展開と方法に落ち着いたのは、ここ十数年といったところでしょうか？それも、専任の時には思いはあってもなかなか時間割が組めず、やっと、特任になってからその思いを実現させているといったところです。以下において、この２科目に限り、もう少し詳しく述べることにします。

「社会教育課題研究」のフィールドワークを学外に求めた理由とその必要条件

とにかく今、電車通学の学生たちが増えており、電車でやってきて校門から坂を上り、授業やサークルが終れば、また電車で帰るといったスタイルが多いのです。美浜町や知多半島にもそれぞれの歴史があり、貴重な資源がたくさんあります。これらを丸ごと知ってから卒業してほしいというのが前々から考えていた私の第１の理由です。第２には、科目の性格があります。この科目は、理論だけではなく、実践をうまくミックスして展開することが大切だと考えていました。でも、地理的条件もあり、数十人の学生を何回も学外に出すというのは容易ではありません。最低限、次の条件が確保されなければなりません。

①２コマの連続した時間が必要

②交通手段をどうするか

③地域のリーダー・ボランティアの人をどう確保するか

などの条件が整わないとできません。まず、①についてですが、社会福祉士以外の資格科目で２コマ続きでゲットするのは、最近は土曜日が使えませんので大変です。②の交通手段についてですが、最近はだいぶん自動車通学をしている学生も増えてきて、グループごとに相乗りで現地までいけるようになりましたし、町内を循環バスが走っていますのでそれを利用することもできます。どうしても条件が合わない学生に対しては、私が送り迎えをしています。③については、この間に教育委員会の社会教育活動などを通して地域の人と懇意になりましたので、気軽に頼める関係が築けてきています。とにかく、学生たちは、こうした実地体験を通して生き生きと心身を活性化させて活動することができるようになってきているのがわかります。

「子ども文化論」について

「子ども文化論」は、ちょうど２０年ほど前に本学の目玉科目として創設されました。当初は二部（夜間部）と短大部にそれぞれ通年（４単位）で置かれていました。ですから前者では簡単な腹話術の基礎をマスター（？）するところまで取組めました。人形作りから始めて発声練習も行い、人前で自己紹介したり、歌を歌ったりすることができるようになりました。この技術は、その後施設などで役立てていると聞いています。また、後者に関しては、「子ども文化」領域で、もっとも奥が深い児童文学の世界まで入り込み、毎週金曜日の朝１限目にもかかわらず、欠席する学生もほとんどなく、私も真剣勝負で取組んだのを懐かしく思い出します。その後、短大が改組された１０年ほど前から２単位（半期）となり、アフターの２単位も２年ほど前からなくなりましたが、その中でもどうしても実技を入れておきたかったので、ここ数年は、「絵本の読み聞かせ」と授業の終る前の数分間で「手作りおもちゃ」を作って遊ぶようにしています。これが楽しみで、最後まで授業を受けている感じの学生もおり（金曜日の５限目ということもあり）、愛おしいです。

このように、カリキュラムの変化を受容し、学生たちの今日的状況に合わせて授業を展開してきて、少々疲れてきました。そろそろ次のステージに移りたいです。

「教養教育における表現をいかに重視するか？」
～表現に対する先生方のご意見～

いかにして教養教育における表現を重視するのか？：英語教育篇

小泉　純一　社会福祉学部教授

表現というキーワードで私が実践してきた英語教育を整理すると、二つのテーマに問題は収斂する。一つは「理解と表現」、もう一つは「発信型」の英語教育である。前者は英語の運用能力に関わる、この教科独自の課題に根ざすものであり、後者は、学生の表現力を向上させる点では、一二年時の演習などと問題を共有している。表現という観点から見ると、この二つのキーワードがクロスしている地点に英語教育は存在している。

大学における英語教育で私が大切だと考えていることの一つは、学生の力量に合わせてではあるが、英語を使いこなす技量を高めることだ。高校までの英語教育では、英語に関する文法などのパーツにはどのようなものがあるのかを学生は学ぶのだが、そのパーツをどうやって使えば自分の思いや気持ちを伝えられるのかを学ぶことは少ない。英語とは自分の外側にあるもので、直接自分との関係もない、「お勉強」の対象でしかない。しかし、個人的には英語を学ぶことで、それまでは知らなかった新しい世界を知ることができ、新しい世界への扉の役割を英語は持っていた。高校までに学んできた英語を使って、どのような世界を体験することができるのかも学生にまず伝えたい。具体的には、一年生の前期で英語を訳さずに理解する直読直解の方法を伝え、洋書の絵本を読みレポートする課題を与える。さらに提出後、プレゼンテーションの資料を作成させ、どこが面白かったのかを発表させている。八割以上の学生がこの作業を通し、英語を読む面白さを感じ、別な絵本を読んでみたいと感じている。英語を学ぶことで得られたものを発表させることで、学生は英語に抱いてきた壁をいくらか崩すことに成功している。この方法は、英語の歌や映画、ネットの英語HPでも応用することができる。英語のパーツを理解することから、それを使って何をすることができるのか、表現へ一歩踏み出す仕掛けと言えるだろう。

受信方から発信型への英語教育への転換が主張されるようになったのは八十年代の半ばころだったと記憶する。パーツの使い方を受信し、模範が示す型に自分をはめ込むという発想から脱し、自分が持つ情報を発信できる力をつけようというものだ。英語を使いこなす力をつけることを目標とするものであり、自己表現力なくしてその達成はありえない。具体的には、英語によるスピーチ、スキット（簡単な芝居）、学生同士による対話などを試みてきた。想像力が発揮できるよう内容は学生に任せ、必要に応じて英文の修正を行った。学生のパフォーマンスはヴィデオに収録し、その後の授業で見せるのだが、モーティベーションの高い学生の場合は特に、英語によるコミュニケーションとその創造性に面白さを感じている。

一定の英語力がついた学生に対しては、自分の創造性を引き出すことができるような英語教育のあり方が必要であり、「表現」という問題はこの視点からとらえる必要がある英語を学ぶことで得られたものを発表させることで、学生は英語に抱いてきた壁をいくらか崩すことに成功している。この方法は、英語の歌や映画、ネットの英語HPでも応用することができる。英語のパーツを理解することから、それを使って何をすることができるのか、表現へ一歩踏み出す仕掛けと言えるだろう。

受信方から発信型への英語教育への転換が主張されるようになったのは八十年代の半ばころだったと記憶する。パーツの使い方を受信し、模範が示す型に自分をはめ込むという発想から脱し、自分が持つ情報を発信できる力をつけようというものだ。英語を使いこなす力をつけることを目標とするものであり、自己表現力なくしてその達成はありえない。具体的には、英語によるスピーチ、スキット（簡単な芝居）、学生同士による対話などを試みてきた。想像力が発揮できるよう内容は学生に任せ、必要に応じて英文の修正を行った。学生のパフォーマンスはヴィデオに収録し、その後の授業で見せるのだが、モーティベーションの高い学生の場合は特に、英語によるコミュニケーションとその創造性に面白さを感じている。

一定の英語力がついた学生に対しては、自分の創造性を引き出すことができるような英語教育のあり方が必要であり、「表現」という問題はこの視点からとらえる必要がある。

なぜ、教養教育における表現を重視するのか？

山本　秀人　子ども発達学部教授

周知のことですが、表現するということは伝達を含むものであり、その伝達方法には言語系伝達（言語的表現）と非言語系伝達（造形的表現、音楽的表現、身体的表現）が存在している。そして、どの方法で表現するにせよ、そこには「観賞」ではなく「鑑賞」を高めていくことが求められてくる。「表現が高まれば鑑賞も高まり、鑑賞が高まれば表現したくなる」（『鑑賞の展開』より）のである。その関係からも、表現と鑑賞を切り離さない取組みが求められる。

そのような取組みによって、「第２回きょうゆうサロン　表現者は学ぶ」で上田さんが報告した「教育改革推進委員会第１ＷＧ報告」でも指摘されているように、「自分の可能性に気づきそれを広げる」「新しい自分に気づく」「自分で動くことを避けなくなる」、そして「人間や社会を見る視点を提供することになる」と思う。

「表現」のための教育、「表現」による教育

中村　信次　子ども発達学部准教授

インターネットの発展は莫大な数の“表現者”を生み出した。これまで、表現のための手段を持たなかった人々が、コストをかけずに自身の信念を多数の人々に開示することが可能となったのである。このことは、表現手段を独占していたマスメディアに対する革命といっていいほど大きな変化である。誰でもが手軽に己を表現するメディアを持っている今日、“どのように表現するのか”という「表現のための教育」はその重要性を増しているものと思う。また、表現することにより、より深く表現対象である自己を見つめなおし、それに対する新たな気づきが促進されるはずである。すなわち、表現を教育ツールとして活用する「表現による教育」が可能となるのである。

「きょうゆうサロン」で報告された本学における表現教育の実践は、今日的な教育の課題にまさに対応した取組みであり、表現を軸とした新たな教養教育の体系化の可能性を指し示しているものと思われる。

編集後記

まずもって、皆さんのお手元にこの報告をお届けすることが遅れてしまいましたことをお詫び申し上げます。昨年度末の第１回きょうゆうサロンで教養教育改革の当時の検討状況が報告されていますが、今やこの検討をベースに最終報告が出され、教養教育連絡会議が立ち上がって具体的な検討に入っている段階です。まさしく、高等教育をとりまく状況が日進月歩のごとくめまぐるしく移りゆくなかで、これからも時宜に則して共有すべきことがあると思いますし、一方で長年にわたる教育実践の中で培われてきた価値などをじっくり共有することも大切と思います。全学教育開発機構としての情報発信に努めるとともに、教職員の皆さんからの発信もいただくような紙面になればと思いますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。（A）

最近、学生と一緒に学外へ出かける事があり、地域の方のお話しを聞き行動を共にする機会を得た。その際に地域の方より「学生と行動できると楽しい、こういった機会をもっと設けて欲しい」と声をかけていただき、私達を受け入れていただいていることを実感できた。また、地域の方のお話は、経験を基に語られるのでイメージが伝わりやすく知らぬ間にその世界に引き込まれてしまうような口調で表現される。このように大学から一歩外に出かければ、さまざまな切口から、教育資源となりうる多様な材料がある。みなさんも地域に出かけてみてはいかがでしょうか。（S）

日本福祉大学 全学教育開発機構 報告誌
「きょうゆう」
第１号
2008年11月

日本福祉大学
全学教育開発機構